

巻頭言

理事長 松田 芳夫

2003年の年頭に際し一言ご挨拶申し上げます。

通常の場合、年の初めという前年が如何に苦しくてつらいものであっても、清々しい気持、改まった気分になり新しい年への希望が湧いてくるのですが、今年は残念ながらそういう気分は起こりません。

作詞家の阿久 悠さんは“時代の病いとしての閉塞感、不機嫌な時代”と言っておられますが全く同感であります。

不景気、高齢化の進行、失業者の増加などの社会経済的な不安もさることながら、小は家庭内暴力やオヤジ狩り、ホームレスいじめ、大はテロから戦争まで暴力依存の風潮がはびこり、個人の生活も社会も国際関係も平和のうちに進歩発展するものと信じきっていた我々日本人にとっては、理解を越える困難な時代になってきています。

私たちの縁の深い公共事業の分野においても、国家財政の逼迫に伴い公共事業費が削減されつつあり、それと同時に公共事業を牽引車として地域開発や市街地の再開発を進めていくというここ数十年来続いて来た手法が主役の座を降り、代って、民間の知恵と高効率を武器に社会資本の整備や環境問題の解決を図っていくという手法が人々の期待を担って表舞台に出てくることとなります。

しかもこういう民営化の方向は世界的な傾向であると喧伝され、電気や水道の供給事業も完全民営化の道歩んでいるなどと説明され、公営的、官営的手法が誤りさらには悪事であるが如き有様です。

しかしながら、土地の所有権や種々の既得権が強力で公益性や社会的規範としての規則、約束、取り決め、ひいては法令までもが軽視されがちな風土の我が国において、私益がゆとりと快適性に富み自然環境に十分配慮した土地利用や都市再生の主役になれるのか疑問をいだくのも理由がないことではありません。

“民間活力、民間活力の活用”とおだてあげバブルを引き起こしてしまった20年前の失敗を再び繰り返すわけにはいかないのです。

環境問題については、国際的には各地での内乱、テロ、戦争など紛争の激化、超大国アメリカをはじめロシア、中国など主要国の環境問題に対する冷淡さ（政治的攻撃道具として環境問題を使うことは増々盛んになるでしょうが。）により何処か他人事のような扱いになりつつあるようです。昨年8月の南ア

フリカ共和国での国連環境会議が1992年の「持続性のある開発」の考えを提唱したりオデジャネイロ会議のような興奮を引き起こさなかったのは当然のことかも知れません。

一方、国内的に見ると、数年内に始まる絶対人口の減少と引き続き圧力が增大する高齢化、その一方で首都圏というより文字通りの東京への人口集中の進行という現実の前に、今や死語と化しつつある“国土の均衡ある発展”あるいは“持続性のある国土利用”、“持続性のある都市計画”をどう進めていくのか、自然環境回復と新しい時代の都市再生へ向け私たちの知恵とエネルギーをどう結集していくのかその真価が試されることとなります。

悲観的に考えれば、窮乏化する財政の下で、具体的に目前に見えている、失業の進行、収入減、年金減、医療費負担増、増税等のマイナス要因が今後当分の間（おそらく数十年間）解消され得ないことを前提にすると、大気汚染、産廃処理場等の公害問題は別として、質の高い公共施設整備等への関心は弱くなるものと思われます。

工費節減と称して片道一車線の高速道路とか天井をマンション並みに低くした学校校舎とか情け無いとしか言いようのない議論が真剣になされているのが今日この頃です。

今年は3月16日から丸々一週間にわたり京都を中心に関西で「第3回世界水フォーラム」が各国から元首、閣僚も多数参加して大々的に開催されます。

「水」というかなり硬派の話題をメインテーマに単なるお祭り騒ぎではない国際的なイベントが、お祭り好きのわが国で開催されるのは久々の快挙であります。後々まで日本の名が残るためには、やはり日本が世界60億人の人々に対し“皆で仲良く話し合いを重ねて”などという以上の哲学、行動指針をアピールできるかが重要であります。現実の国際政治のパワーポリティクスの前にそれも困難なことかも知れません。

年頭のご挨拶にしてはいささか元気がありませんが、当センターは頭を使うことを目的としている以上“夜食足りて礼節を知る”の現実もさることながら“武士は食わねど高楊枝”の気概を持ちつつ役員一同50人今年1年を頑張っていく所存でありますので、従来にも増して皆様の御支援、御指導をお願いする次第であります。